

洞爺丸遭難のナゾ

自然災害にもしが許されれば、もし伊勢湾台風のコースがもう少し東を通っていたら、もし満潮の時刻とずれていれば、あの最悪の高潮被害は起こらなかっただろう。もし超大型で非常に強い台風十二号が江の島付近に上陸したら高潮と洪水で首都圏は大被害：」と、台風からみれば気紛れ程度の違いが大災害の分かれ道となる。昭和二十九年九月二十六日の夜、台風二五号マリーの暴風雨と激浪に巻き込まれて函館湾に沈んだ青函連絡船洞爺丸遭難には三つの気象のナゾが残されていた。もしその一つでも欠けていたら史上最悪の海難の悲劇は起こらなかっただろう。

偏西風に乗って時速百キロの韋駄天走りに日本海を北上した台風が、函館の北西海上で突如として速度を落した『ナゾの急減速』、台風にとって冷たい日本海の上を走りながらなぜか発達し続けた『ナゾの再発達』。そ

して嵐のなかのつかの間の静寂と雲の切れ間からの一筋の陽光を見せた『霧りの晴れ間』のナゾは、台風の目の通過を錯覚させ、出航の決断の一つとなった言われている。

函館の北西海上での再発達と急減速は、函館湾が台風の最も危険な南東象限に入り、四十キロを超す南西の暴風雨が長く続くことを意味していた。天然の良港である函館湾は湾口が開く南西方向にのみただ一つ弱点を抱えていた。津軽半島の北端と函館を結ぶ線がこの方向に一致しており、海峡を越えて吹き続けた暴風と波浪を遮るものがない。この弱点を突いて一直線に侵入してきた波浪を南西の暴風が追い討ちをかけて、まさに洞爺丸の遭難の一点に向かって自然の凶暴な牙が集中した格好となった。

もし南西風でなく、もし再発達と減速がなかったら、三つのナゾの一つでも欠けていれば悲劇は起こらなかっただろう。三つのナゾは台風が発達した温帯低気圧に変身する過程で起こる現象として解決されたのは二十数年後であった。一度と惨事は繰り返すこ

とはないだろう。
(村松 照男)